

# 電子人間化したスーパーヒーローの声と肉体

・批評家  
粉川哲夫



レーガン体制はうってつけの反動スターなのだ、などと考えた。

それが、全然ちがうと思ったのは、マドンナが野外ステージで歌うライブのテレビ中継を見てからだ。歌の調子は以前と同じで、さらに幼稚になった感じがしたが、観客に向かってしゃべりかける態度や調子が、実にパンクっぽいのである。そしてときには、観客を愚弄するようなことを言って皮肉な笑いを浮かべたり、どこかにセックス・ピストルズやスリッツにつながるふてぶてしささえある。へえ、とわたしは思い、急に彼女が好きになった。

この偏見を助長したのは、彼女はレコードとビデオによってつくられたスターであり、ライブは全然未知数ののだという風聞だった。また、フェミニズムに弱いわたしは、「マドンナはフェミニズムの歴史を二〇年遅らせた」という風聞にも大いに影響され、「マテリアル・ガール」を聴いたとき、こいつは、

「超越論的」なパーソナリティーなんかを残さずに、徹底的に行くところまで行ってしまおうじゃないのと考えている点だ。人格を「物質」と化し、どのようにも記号交換できるものとするとき何が起るのか？ マドンナの歌、演技、そして発言は、そうしたマテリアリゼーションのパフォーマンスである。こう考えてみると、彼女の歌の声調がなぜあれほどシンセッぽいかわかるだろう。彼女は、声から「肉」の部分を排除しているのである。といって、それは、機械の声になることではない。今日の電子テクノロジーは、電子操作によってほとんどどのような音でも合成することができ。だから、マドンナは肉声を、いかにも電子装置で作色あせて『彼女』の「実」で、

それが、全然ちがうと思ったのは、マドンナが野外ステージで歌うライブのテレビ中継を見てからだ。歌の調子は以前と同じで、さらに幼稚になった感じがしたが、観客に向かってしゃべりかける態度や調子が、実にパンクっぽいのである。そしてときには、観客を愚弄するようなことを言って皮肉な笑いを浮かべたり、どこかにセックス・ピストルズやスリッツにつながるふてぶてしささえある。へえ、とわたしは思い、急に彼女が好きになった。

こがわ つお 一九四一年、東京生まれ。現在、和光大学講師。主な著書に『メディアの牢獄』『ニュー・ヨーク情環境論』『ミクロポリティクス』など。

# Madonna

その女は、天井まで本のびっしり詰まった書架のあいだのストトルに腰を下ろしていた。金髪のはげはいる。映画『キャバレー』のライザ・ミネリのスタイルを少しパンクっぽくしたようなかっこだ。場所はニューヨークのダウンタウンにある古書店「ストランド」の店内。彼女は新顔のパートタイマーである。この街では特に驚くべきことではないが、一体この人は何者だろうと思わせる雰囲気的人物が、ありきたりの仕事をしている。マドンナが『ライク・ア・ヴァージン』とともにマスメディアに躍り出て、MTVのビデオ・クリップに姿を現したとき、わたしはふと、この女のことを思い出した。そして、マドンナことマドンナ・ルイズ・ヴェロニカ・チッコリーネが、一九七八年にミシガン州からニューヨークへ出てきて、さまざまなアルバイトをしながらダウンタウンに住んでいたことを知り、

ストランドの女がマドンナ・チッコリーネにちがいないと思うようになった。彼女がダンキン・ドーナツやバーガー・キングのカウンター係などのアルバイト職を転々としていたころ、わたしは、現在マドンナのスタイリストをやっているマリール・ロフトの真向かいのアパートに住んでいた。マドンナは、日本では、「マリリン・モンローの再来」とか、「歌うセックス・シンボル」というようなイメージとともにポピュラリティーを獲得してきていた。しかし、わたしにはニューヨークのいたるところで出会う少しきれいな街のねえちゃん」という感じがする。

マドンナの『ライク・ア・ヴァージン』にテレビで初めて接したとき、なんでこんな歌い方の歌手がヒットするのだろうと思った。ほとんど肉体を感じさせない声質と、まあマリリンに似ているといえば似ていなくてもいいけれど、むしろピッツァ店の女の子がデイスコへ行くのちょっとおめかしをしたといっ

た風情。歌うときの身ぶりはスピーディーなのが、これもデイスコにはよくいる元気はつらつのおねえちゃん。これは、シンセサイザーやエフェクターでこしらえあげた声と、いくらでも操作できるビデオ映像の効果をもっている歌手にすぎないのではないか——わたしはそんなふうに思った。

この偏見を助長したのは、彼女はレコードとビデオによってつくられたスターであり、ライブは全然未知数ののだという風聞だった。また、フェミニズムに弱いわたしは、「マドンナはフェミニズムの歴史を二〇年遅らせた」という風聞にも大いに影響され、「マテリアル・ガール」を聴いたとき、こいつは、



映画で、マドンナはパンクの娘を見事に演じている。しかもこの映画は、ニューヨークから創造的なうさぎさや下品さを奪おうとしている新興階級（ヤッピー）を徹底的に揶揄しているのである。ニュージャージーに住む裕福なヤッピーの妻（ロザンナ・アリエット）がパンクの女（マドンナ）にあこがれ、ひよんなことから彼女の身代わりになつてしまおうということ自体、皮肉である。

とがもっているもつと深い関係を見ていない。『デスペレート・リー・シーキング・スーズン』がマドンナと切り離すことができないのは、この映画で彼女が人格を交換することの徹底的な自由ということを演じているからである。パーソナリティーなんて、どうにでもなるものよ。だって、あたしはマテリアル・ガール（物質女）なんですから、と言わんばかりに。

「超越論的」なパーソナリティーなんかを残さずに、徹底的に行くところまで行ってしまおうじゃないのと考えている点だ。人格を「物質」と化し、どのようにも記号交換できるものとするとき何が起るのか？ マドンナの歌、演技、そして発言は、そうしたマテリアリゼーションのパフォーマンスである。こう考えてみると、彼女の歌

ったという人工性を強調するやり方で用いているのである。このことは、たとえば『ライク・ア・ヴァージン』というLPに入っている『愛は色あせて』と、タイトル・ナンバーとをくらべてみればすぐわかる。前者で彼女は、他の曲とはがらりとちがう情感的な調子で「愛はどこかへ消え去ってしまった……」と歌っている。これは、マドンナが、三流のデイスコ・シンガー流のさえずり声でしか歌えないのではないかとという疑いを一挙にはらすだろう。そして、『ライク・ア・ヴァージン』以下の彼女の歌が、いかに意図的に電子音化されているかを明らかにするだろう。

この話をパフォーマーのナンシ・ゼンドーラに話すと、フェミニストでエコロジストでもある彼女から意外な言葉が返ってきた。彼女は「すごくいら」といっているのである。そして、マドンナが主演する『デスペレート・リー・シーキング・スーズン』（邦題『マドンナのスーズンを探して』）を見ることをすすめられた。

この映画でマドンナ自身は、ちゃっかりと金持ちの妻の位置をくすねてしまう役を演じているため、この映画は、「計算高い女」マドンナというイメージと重ね合わせて見られることが少なくない。しかし、そのような見方は、マドンナとこの映画

マドンナの新しさは、もし人生（彼女にとってそのメイン・テーマは「愛」である）がすべて演技ならば、その背後に何か

た風情。歌うときの身ぶりはスピーディーなのが、これもデイスコにはよくいる元気はつらつのおねえちゃん。これは、シンセサイザーやエフェクターでこしらえあげた声と、いくらでも操作できるビデオ映像の効果をもっている歌手にすぎないのではないか——わたしはそんなふうに思った。

それが、全然ちがうと思ったのは、マドンナが野外ステージで歌うライブのテレビ中継を見てからだ。歌の調子は以前と同じで、さらに幼稚になった感じがしたが、観客に向かってしゃべりかける態度や調子が、実にパンクっぽいのである。そしてときには、観客を愚弄するようなことを言って皮肉な笑いを浮かべたり、どこかにセックス・ピストルズやスリッツにつながるふてぶてしささえある。へえ、とわたしは思い、急に彼女が好きになった。

## 碌山・32歳の生涯

仁科傳著／三省堂選書138／1,400円

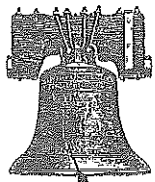
短い一生を芸術にかけ、意志と信念の赴くまま懸命に生き抜いた彫刻家・萩原碌山の生涯を描いた評伝。また、碌山という一人の青年を通して、「明治人」の精神の軌跡に迫る。



## ポーランド入門

阪東 宏編／三省堂選書139／1,500円

ポーランドへの多様な関心に応え、歴史から政治・経済・文学・音楽・スポーツに至るまで、各分野ごとにわかりやすく解説。ポーランドの全体像を知る格好の入門書。



## 「明解」アメリカ史

中屋健一著／2,200円

アメリカ史研究のパイオニアである著者による通史の決定版。イギリスのアメリカ植民地建設から第二次大戦後の社会まで、事実の正確な把握のもと、アメリカの歴史を描く。

三省堂 千代田区三崎町2-22-14

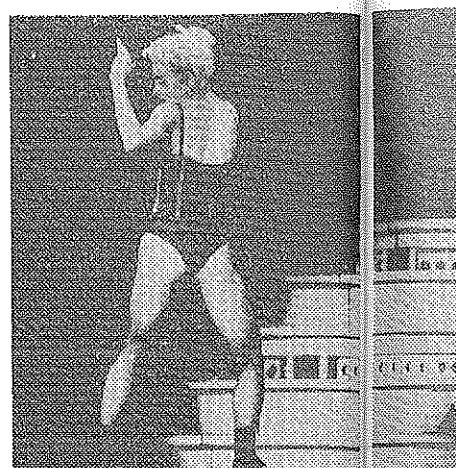
他が電子的な「虚」であるといふ意味ではない。この曲での彼女の歌い方をよく聴けばすぐわかるように、それはバーブラ・ストライサンドのまねなのである。つまり、マドンナは、情感的なものでも相対化してしまふのであり、自分を徹底的に電子的な「マテリアル・ガール」にしようとするのである。

★「単」ではなく★  
多様な★彼女の性

タロインは、映画の外でも強くなければならぬ。マリリン・モンローは、スクリーンの外側でも「浮気」でなければならぬ。というの、彼女彼女らにとつて演技とは所詮、素顔を隠すための仮面であり、その演技行為は、素顔をあばこうとする観客との追いかっことであるからである。

マドンナには、いわばコンピューター・グラフィックスが生んだテレビのヒーロー、マックス・ヘッドルームの趣がある。どこにも肉体の存在しない映像だけの「人間」がスターになる時代が始まった。むしろこれまでも、たとえばディズニー漫画の主人公たちは、肉体を持たずにその映像存在だけでスターになってきた。しかし、それらは最初から架空の存在であるという暗黙の了解のもとでそうなりえたのである。

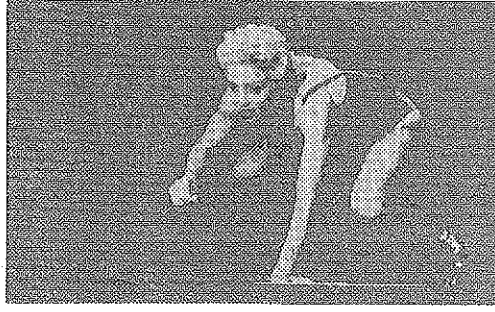
マスメディアのなかで生まれポピュラー・ヒーローには、どのみち、その生身の肉体とは無関係な「虚像」がつきまといている。その結果、彼女彼女らは、その私生活を演出せざるをえなくなる。シルベスターズ



マドンナは、そうした追いかけっこに終止符を打とうとする。彼女が、(いまのところ)比較的自己の過去にあげつばりげなのはこのためだ。彼女には、ステイブ・ブレイヤージュン・ジェレイベーン・ベニテスとの浅からぬ関係があったし、一九八五年にはジョン・ペンと結婚している。ところが、(これはわたしだけかもしれないが)彼女の場合、そうした男関係があまり興味をひかないのである。彼女は、まさに、いつも「ライク・ア・ヴァージン」なのだ、そこには「乙

女」の雰囲気は全くないのだ。このことは、マドンナのもつセクシュアリティの問題とも無関係ではない。伝統的なセクシュアリティは、隠蔽と露出の力学のなかを動いている。だから、マリリン・モンローのセクシュアリティを支えていた。しかし、電子映像の普及とともに、そのような隠蔽と露出の力学は終わりはじめた。

マドンナにとって、セクシュアリティの効果をために隠すべき「陰部」はどこにもないだろう。彼女は、来目してすぐ、体に密着した下着のような衣装で歌ったが、それは、胸や鼠蹊部を隠蔽するための覆いではない。彼女には隠すべきものは何もない。マドンナがときとしてポルノ映画のなかの女優のような表情を見せるのはこのためだ。彼女は、いわば体をすっば



り包んでいてもセックスしている。「ヴァージン・ツアー」というビデオの冒頭に、明らかにマリリン・モンローを形態模写した短い映像が入っているが、これがマリリンを想起させるのは、横、前、横たわった頭部の側面という二つのショットをほとんどステール写真のようなやり方で瞬間的に見せているからで、もしマドンナが自分の顔をもっと長くカメラにさらしたならば、彼女はマリリンとは別のイメージを提示しただろう。現に、写真家のフランチェスコ・スカプロは彼女をマレーネ・デイトリッヒに比し、「デスベ

の風格を示した」と言われ、また危ぶまれたライブ・ツアーで逆に彼女の「力量を發揮した」と言われるように、マドンナは少しずつその有機的な「肉体」感を肥大化させつつある。彼女に接したところのある人は、しばしば彼女のもつ「独特の雰囲気」や「カリスマ性」を語る。おそらく、それはそのとおりなのだろう。

マドンナは、  
「ハーバーズ・  
バザール」誌が  
彼女を評して言  
ったようなポリ  
モーフアス(多  
形)な存在を維持している。す  
なわち、「ウェディングドレス  
にスパイクヒールをはけば、駄  
々っ子に。ランジェリーに、安  
物のゴム製ブレスレットをつけ  
れば、妖婦に。頭にポロ布をま  
きつけ、アスレチックTシャツ  
のすそを短く切り、おへそを丸  
出しにすれば、はねっかえり娘  
に。これらすべてが、マドンナ  
なのだ」(羽田詩津子訳/マー  
ク・ヒーゴ『マドンナ』)。

しかし、他方で彼女は、たつた二本目の映画出演で「大女優  
りかえし」。  
マドンナは、  
「ハーバーズ・  
バザール」誌が  
彼女を評して言  
ったようなポリ  
モーフアス(多  
形)な存在を維持している。す  
なわち、「ウェディングドレス  
にスパイクヒールをはけば、駄  
々っ子に。ランジェリーに、安  
物のゴム製ブレスレットをつけ  
れば、妖婦に。頭にポロ布をま  
きつけ、アスレチックTシャツ  
のすそを短く切り、おへそを丸  
出しにすれば、はねっかえり娘  
に。これらすべてが、マドンナ  
なのだ」(羽田詩津子訳/マー  
ク・ヒーゴ『マドンナ』)。

つ脱出口を見る。電子テクノ  
ロジーを単に無批判に拒否(し  
かし、相手はそのような拒否を  
許さない)するのではなく、そ  
のなかにどこまでも入りこん  
で、そこに起る予想を超えた  
出来事に賭けること——マドン  
ナのパフォーマンスにはそんな  
一面が見いだせる。  
はたして彼女は、その道をど  
こまでも突き進むだろうか？

画の産物であるといった事態のはるかに先をいく。これは、すでにマイケル・ジャクソンとともに始まっていた事象である。マイケル・ジャクソンは、男性のでも、黒人のでもないその声が端的に示しているように、メディアが生み出す人工的な身体性を前面に押し出したポピュラー・ヒーローである。彼が『スリラー』で見せた変身は、彼の方法論をいみじくも示唆している。

電子技術の狂気  
★電子技術の狂気★

しかし、彼の場合、彼が顔の整形手術をくりかえしているように、素顔の存在が依然コンプ

マドンナはもはやこのレベルにはいない。彼女は、自分のイメージも肉体も、メディアがONになっているときだけ存在しているかのようにふるまう。まさに、『オーヴァー・ア

われているように「わたしはまた起きあがる くりかえし」

しかし、ここに、電子テク

節を、私はマドン

生命観、進化論にパラダイム  
変換を迫るドーキンスの新著

延長された  
表現型

自然淘汰の単位としての遺伝子  
日高敏陸, 他訳 欧米でいま最も人気の高い進化論者ドーキンスが、「利己的遺伝子」から見た生命観、進化観、世界像を展開する。知的興奮を呼び起すスリリングな科学読物 定価3500円

生物=生存機械論

利己主義と利他主義の生物学  
R.ドーキンス/日高, 岸, 羽田訳 動物の社会行動を利己的遺伝子の生き残り戦略として説き、社会生物学論争で注目の書 定価2300円

自閉症児と  
生きる

A&F, フローネ/布施佳宏訳 自閉症児の世界をとりまくさまざまな問題をくわしく解説する本書は、家族の人に大きな希望を与えよう 定価3300円

思春期やせ症の世界

その患者と家族のために  
クリスブ/高木, 石坂訳 やせ願望から食事を極端に制限する心身症の世界を詳述する 定価2600円

マンガ文化

副田義也 現在のマンガ文化をあらゆる角度から分析し、マンガのもつ魅力をもつて明らかにした力作 定価2500円

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3-17-7 ☎(354)0131 (出版部)  
東京都世田谷区桜丘5-38-1 ☎(439)0125